◆原ひろ子先生追悼特集◆

原ひろ子先生を偲ぶ

柘植あづみ
（明治学院大学）

原ひろ子先生は2019年10月7日にご自宅で逝去された。享年85歳だった。83歳まで城西国際大学で教鞭をとられ、博士論文の指導をされた。同時に科研費「災害・復興政策の比較ジェンダー研究―多様性に通ずるレジリエンス構築に向けて」も遂行された。生涯現役だった原先生の思い出を短くまとめるのは難しいため、ここではお茶の水女子大学（以下、お茶大）に勤務されていたころを中心に記したい。

1. 調査方法なら教えてあげる

私がお茶大の女性文化研究センター（以下、センター）を初めて訪れたのは1989年の夏だった。大学院博士課程で学ぶ先を探していた。教員らしき女性に用件を伝えると、入試要項の入手場所と原先生に面会予約をする方法を親切に教えて下さった。あとで舘かおる先生だったとわかった。

ところが原先生はなかなかつかまらない。後で知ったが、原先生はセンターと学部を兼担して大勢の指導学生がいただけでなく、3月まで国際女性学会（現、国際ジェンダー学会）の代表幹事として国際会議を開催していた。また同年に出版した『ヘヤー・インディアンとその世界』（平凡社）が新潮学芸賞を受賞した。その他、行政の審議会委員、複数大学での非常勤講師も引き受けておられ、原稿依頼も膨大にあった。さらに90年度の日本民族学会長が決まっていた。

やっと「朝7時半に自宅に電話ください」と伝言をもらい、勇んで電話したが、すでに話し中。つながったときにはもう時間がなく、センターの年末大掃除の日に伺うことになった。「汚れてもいい恰好でいらっしゃいね」という言葉に戸惑いながら出向き、あいさつもそこそこに、図書館の一角にあるセンター所蔵図書の整理を担当したが、原先生の来客が多くて研究テーマの相談はできず、年明けに電話することになった。

ところが年明けに大変なことになった。原先生の夫の原忠彦東京外国語大学教授がバングラデシュで急逝されたのだ。そうとは知らずに電話すると、留守番の方から、1週間は連絡とれないと告げられ、呆然とした。まもなくして原先生からお電話をいただいた。それで何とか受験には合格したが、二つの院に合格し、迷ってご相談すると「生殖技術のことは教えてあげられないけど、調査方法なら教えてあげるわよ」と言われた。これで決めた。そのときはどれ

DOI：10.24567/00063798

だけ大勢が原先生に調査を習いたいと憧れているか知らなかった。

2. 学生指導

原先生は講演等の出張も多かったので、学生がターミナル駅や空港まで同行し、車中で指導を受けた話は事欠かない。

院ゼミは、田中真砂子先生（文化人類学）と共同で「女の一生研究会」が開かれていた。お二人とも発表した学生への質問とコメントが鋭く、田中先生はナイフでスパッと切り、原先生は鉈でドサッと切るといわれていた。それで皆、切られ強くなった。

農村でのフィールドワーク実習は、原先生よりも高齢の研究生やお茶大以外の若手研究者など多様なメンバーが参加し、「（湾岸戦争の）多国籍軍みたい」と地元の方に揶揄された。

多忙にもかかわらず、非常勤講師をいくつも引き受けていた。女性学の興隆期だったのもあるが、そのポストを若手に引き継ぐためだった。お茶大の院生にとって非常勤講師のポストを得るのは容易ではない時代だった。私も自治医科大学の看護短大（当時）の女性学の非常勤講師を譲っていただいた。引継ぎのために原先生に同行したことがある。お茶大から片道2時間半はかかったため、原先生は夕方にセンターを出発し、自治医大の教員宿舎に前泊されていた。朝1・2限に授業するためだ。大きな畳の部屋に二人で泊まり、翌朝は先生のヨガを初めて拝見した記憶が鮮明に残っている。

原先生は自身が苦労された経験から、学生の就職には尽力された。「原ゼミの会」メンバーは「紆余曲折」の人が多いと言われている。私もご多分に漏れずなので、大学院の4年目を終えるとき博論執筆継続と生活の両立に困ることがあった。そのときに田中先生が「あなたにぴったり」と教員公募の情報を持って来て下さった。Web公表される時代ではなく、締切まで間がなかったため、夜、原先生のご自宅に伺って相談し、推薦状を書いていただいた。そこで無事に採用されたため今の私がいる。その経験から、自分が推薦状を書く際には、できるだけ心をこめて書くようにしている。

3. プロジェクト、シンポジウム、etc.

センターではつねに複数プロジェクトが進行し、来訪者が多く、いつも活気があった。入学間もなく「『母性』をめぐる日独シンポジウム」（東京ドイツ文化センター共催）が開催され、事務方の手伝いをした。その後も手伝いには度々駆り出されたが、知識とアルバイト代とチャンスを貰えた。日独シンポの成果刊行物に書かせてもらった論文は、私の初の書籍所収論文になっている。

ジェンダー研究センターになってからは、教官が1人増え、外国人客員教授の枠が得られ、以前にもまして、セミナー、シンポジウム等が開催された。さらにその成果が書籍として刊行された。それが「21世紀COE　ジェンダー研究のフロンティア」に繋がったのだと思う。COE実施は原先生の退任後だったが、申請時から深くコミットされ、事業推進担当者もされた。

4. 台所は火の車

しばらくセンターに出入りしていると、

慢性的に予算不足だとわかり、さらにセンターが無くなるという噂が耳に入ってきた。センターは1975年に創設された女性文化資料館から1986年に10年の時限付きで組織換えされてできた。原先生は1985年にお茶大に着任し、舘先生と共同でセンター立ち上げ準備から関わられた。予算不足を補うため、原先生と舘先生は常に科研費補助金などの競争的資金を得て、他の研究機関や団体等との共催でシンポジウムを実施してきた。その申請書、報告書や成果物作成にも追われていた。こう書くと、いまの国立大はどこも同じと言われそうだが、法人化前のことで、その意味では良くも悪くも先端を走っていた。

私は1994年に北海道に職を得て、博論提出を優先するよう厳命されていたので、ジェンダー研究センターに移行する時期はあまり知らない。元女性文化研究センター長だった清水碩先生が「こうした慢性的な経費不足のなかで、よくもこれほど多くの研究成果が得られたものというのが、偽らざる感想である」（『女性文化研究センター年報』第9・10号:1－4、1996）と書かれているのを読み、首肯した。

1996年にジェンダー研究所が立ち上がり、原先生は1998年4月からご定年の2000年3月まで2代目のセンター長を務められた。

5. 社会的貢献活動

原先生は社会的活動にも熱心だった。まず、1994年のカイロ国際人口・開発会議や95年の北京世界女性会議に向けて外務省とNGO準備会をもち、国際人口・開発会議の予備会議（ニューヨーク）には政府代表の一人として、リプロダクティブ・ヘルス／ライツに重要な提案をされた。同時にNGO「女性と健康ネットワーク」の活動にも熱心だった。NWECや内閣府男女共同参画室（当時）の活動にも深くコミットされた。厚労省のDV被害者の公的シェルター設置に関する委員、JICA（国際協力事業団）の開発援助におけるジェンダー主流化にも力を注がれた。

さらに、JAICOWS（女性科学研究者の環境改善に関する懇談会）の会長を務め、女性研究者の環境改善を実行した。文部科学省の科研費の細目「ジェンダー」を設けるのに尽力された。また、科研費を交付された人がその後に出産して3か月以上の休暇をとると科研費を辞退せざるをえなかったルールを変え、研究を延期できるようにした。日本学術会議の女性会員の増加にも貢献された。このような奮闘努力によって今の環境があり、それをさらに改善するために私たちが努力する必要があることを改めて思う。

原先生と最後に研究のお話をしたのは2019年4月だった。書籍の1章に敗戦後の引揚女性の中絶と優生保護法の関係を考察したと説明すると、原先生の引揚体験とご両親の医療救援活動について1時間ほどお話を伺った。

最後まで師であった。ご冥福をお祈りする。